

かけがえのないもの

普段は眠っているけれど、時々目を覚まして私の心を曇らせる思い出がある。小学生の頃の出来事だ。私は学校が好きだった。友だちとも上手くいっていると思っていた。ごく普通の小学生だった。しかし、その日の出来事は今までの自分の価値観が変わる衝撃的なものだった。

いつも通り次の授業で使う教科書を机の上に用意した時だった。それは鋭く、冷たく私の目に飛び込んできた。「死ね」

誰かの字で書かれた、たった二文字。私は身体が固まり、自分に流れる血が一気に冷たくなるのを感じた。息ができなくて、涙があふれた。身体の震えはずっと止まらなかった。

私の様子に驚いた友だちが、慌てて先生を呼びに行き、すぐに緊急の話し合いになった。私のそばには心配してくれる友だちがいた。私に起こった事に怒って悲しんでくれる友だちがいた。それでも私は、そんなみんなが怖かった。ずっと下を向いて泣いている事しかできなかった。どんなに話し合っても文字を書いた人は名乗り出なかったし、私自身にも思い当たる人はい

なかったからだ。誰か分からない人から向けられた感情は、暗やみで背後から襲われたようでも怖かった。授業が終わって家までの帰り道は、今日の出来事を両親にどう伝えるか考えていた。それだけしか考えられなかった。あつという間に家に着き、玄関を開けた時に聞こえた母の「おかえり」の声に、また涙が出そうだった。結局、私は自分の口で両親に伝える事ができなかった。こんな気持ちになった事は初めてで混乱していたし、両親を悲しませたくなかったからだ。母は学校からの電話でその事を知った。相談したら

困らせてしまうと思ったけど、思い切った事全てを吐き出した。母は私の目を見てうなずきながら真剣に話を聞いてくれた。そして、私の事をかけがえのない大切な人だと言ってくれた。私のことを想ってくれる人がいる事が分かり、安心して力が抜けた。固まっていた身体が少し緩んだ気がした。次の日学校に行くのは怖かった。やっぱり涙は止まらなかったし、足が震えた。付き添ってくれた母に学校に入りたくないとしがみついた。その時先生や友だちが私を迎えに来てくれた。話を聞くよと寄り添ってくれた先生。いつもと

変わらず笑顔で迎えてくれた友だち。私はその日をみんなの支えで乗り越える事ができた。しばらく苦しい日が続いたけれど、いつの間にか私は以前のよう学校へ通い、友だちと笑い合えるようになった。

しかし、今でも時々思い返すのは匿名で感情をぶつけてきた相手のことだ。なぜ名前を隠したのだろう。クラスで話し合いをしていた時はどんな気持ちでその場にいたのだろう。私だけではない、先生や友だち、両親が悲しんでいる姿をどんな気持ちで見ているのだろう。きつと怖くてたまらなかったと思う。不安で後悔していたと思う。学校が辛い場所になってしまったのではないだろうか。

思い出すと心は曇るけれど、私は今も学校が好きだ。友だちと過ごす事が好きだ。しかし以前と変わった事がある。それは全ての人から好かれる自分でいなくてもいいと思えるようになった事だ。社会が広がり、繋がる人が増えれば相性の悪い人と出会うこともあるだろう。しかし私には、私のことをかけがえのない大切な一人だと言ってくれる人がいる。辛い時に寄り添ってくれる人もいる。その人達の笑顔を守るためにも、私は私らしくいたいと思

う。

辛い出来事だったが、私は大切なことを学んだ。それは、顔や名前のない感情は暴力になりうるということだ。両親に想いを込めてつけてもらった名前を隠して感情をぶつける事は、自分で勝手で誰も幸せになれない。自由に意見を言える権利と感情をぶつける暴力は全く別のものであり、権利の基には幸せがなくてはならないのだ。感情を声や文字にする前に一度立ち止まってほしい。そして、その言葉や文字に責任をもってほしい。それだけで社会は少し変わると思う。

今の私があるのは、辛い時に支えてくれた人達がいたからだ。だから困っている人や苦しんでいる人に次は私が寄り添いたいと思う。そして自分の行動や発言に責任を持ち、自分の事を大切に生きたいと思う。なぜなら私の心も身体もかけがえのない大切なものだから。誰もが幸せに生きる社会にするために、一人一人が自分の言動に責任をもって後悔のない人生を送ってほしい。誰の命もまた、かけがえのない大切なものだから。

この作品を朗読動画にしたものはこちら▼

